

句動詞の統語構造

away を中心に

新沼 史和

1. Introduction

Los et al (2012)によれば、英語の不変化詞の中には、もともと前置詞句(*away* → *onweg* → *on way*)だったものがあり、それが前置詞、あるいは副詞といった語のレベルに発達し、それから、前置詞が項を義務的に要求する段階から随意的に要求するようになり、最後には全く要求しなくなった、という歴史的発達が見られることが論じられている。

そこで、興味深いのが、Jackendoff (1997)などが論じている *away* のアスペクト的意味の存在である。*Away* は、方向を表す意味から継続のアスペクトを表すものへと変化したということが石崎(2010)、Ishizaki (2012)などで言われている。しかしながら、このアスペクト的意味の獲得がどのようにプロセスによって行われてきたのか、という問題はまだ明らかになっていない。そこで、本論では、Roberts and Roussou (2003)の *upward reanalysis* の精神に基づき、このアスペクト的意味の獲得が統語構造に反映し、文法化のプロセスを経て行われた、ということ論じる。

2. Properties of the particle *away*

本節では、方向を表す *away* と継続アスペクトを表す *away* の統語的特徴について述べる。最初に、方向を表す *away* は自動詞と結合することができるが、句動詞全体としては非対格性を見せる。例えば、(1)に挙げたように、非対格動詞の過去分詞形は能動的な意味を持って名詞修飾が可能であるのに対して非能格動詞はそれができない。それを基にすると、(2)は、句動詞全体が非対格性を持っているということになる。

- (1) a. unaccusatives: the melted snow, the departed guests, the fallen soldiers
b. unergatives: *the shouted victim, *the slept child, *the hesitated leader
- (2) a. the backed away boy
b. the run away boy

興味深いことは、この方向を表す *away* が結果構文と同様の特性を持っているということである。一般的に結果構文は内項を持つ動詞、つまり他動詞と非対格動詞と結合すると言われている(cf. Levin and Rappaport Hovav (1995))。また、McIntyre (2004)が正しければ、動詞ではなく、結果構文の2次述語が内項と叙述関係を持つと言われ、その証拠が(3-4)に示したように自動詞が結果構文に現れた際に内項を必要とし、(5-6)のように、他動詞であっても、動詞では要求しない内項でも不変化詞と共に起した場合には可能になる。

- (3) The dog barked me away. (cf. *The dog barked me)
- (4) The jogger ran the pavement thin. (*The jogger ran the pavement.)
- (5) clear away the dishes (cf. *clear the dishes)
- (6) John washed off the dirt. (*John washed the dirt.)

次に、継続のアスペクトを表す *away* について考察しよう。嶋田(1985)や Jackendoff (1997)などで指摘されている通り、継続のアスペクトを表す *away* は、atelic な動詞、つまり非能格動詞とのみ共起できる。

- (7) a. Are you all knitting away furiously for Christmas?
b. ... a traditional fairground music organ playing merrily away.

また、直接目的語をとることができないが、その代わりとして、conative construction を許す。

- (8) a. He was scrubbing away at the floor. (cf. He was scrubbing the floor.)
b. I was typing away at my report. (cf. I was typing my report.)

要約すると、方向を表す *away* は項を義務的に要求し、継続アスペクトを表す *away* は項を持つことができないということである。

3. An analysis

前節では、方向を表す *away* とアスペクトを表す *away* の統語的相違について検討した。本節では、その相違を捉えるため、(9)にあるように Cinque (1999)のカートグラフィーの精神に基づいて動詞句の構造を提案した Ramchand (2008)の統語構造と、藤田・松本(2005)や Travis (2010)などで提案された動詞句内にも機能範疇があるという主張を合体させた Ogawa and Niinuma (2013)の動詞句構造を仮定する。そして、不変化詞 *away* は、初期の段階には動詞句の一番下にある Result の主要部に存在し、継続のアスペクト解釈を持つときには Proc のすぐ上にある Asp(ect)に存在すると主張する。

(9) [InitP Init [AspP Asp [ProcP Proc [ResP R]]]]

Result head は、Spec の位置に項を持つことができ、その結果として述部関係を形成する。それに対して継続を表す *away* は、機能範疇として R よりも高い位置に存在すると主張する。また、継続の *away* は、*atelic* を表す自動詞と共起するということを説明するために、タイプ強制(*type coercion*)により ResP と共起できなくなる、と仮定する (cf. Travis (2010))。この分析が正しければ、継続の *away* は、文法化により、方向を表す *away* が基底生成される R の位置から upward reanalysis(Roberts and Roussou (2003))によって Asp の位置へと移動したことになる。加えて、項を義務的にとる方向を表す *away* から項をとらないものへの変化ということで、*valency reduction* をも説明でき、また、方向から継続という意味の変化、いわゆる *semantic bleaching* も説明できる。

しかしながら、この文法化のプロセスだけでは説明が不十分であると思われる。なぜなら、そもそも方向を表す、いわゆる *telic* なものから、継続を表す *atelic* なものへの変化、そして、*away* が項をとらなくなったのは、Los et al (2012)では不変化詞でも見られることから、この変化に対して何らかの説明が必要である。

そこで、私は、この変化には、目的語の削除という要因があると主張する。文字通り、目的語の削除は項を具現化しないということである。この目的語の削除という現象は、*telicity* にも影響があるとされており、以下に示す通り、内項の特徴に関係なく *atelic* になる。

- (10) a. John ate the apple in/*for an hour.
- b. John ate apples for/*in an hour.
- c. John ate for/*in an hour.

要約すると、*away* が継続のアスペクトへと変化したのは、*away* が項をとらなくなったことに加え、動詞が内項を削除し、*telic* から *atelic* な事象へと変える現象という 2つの要因によって生み出されたものである。従って通時的には継続のアスペクトの *away* は、方向を表す *away*、そして目的語削除の現象よりもあとに現れたものである、ということ予測する。次節ではそのデータを提示する。

4. Corpus Data

上で論じた予測を検証するために、Corpus of Historical American English (COHA)を用いる。本節では 1例として *eat* の使用について検証する。表 1、2 に示した図は、*eat* の自動詞用法と *eat away* の他動詞用法と自動詞用法の年代ごとの推移である。これを見てわかるように、*eat* の自動詞用法はかなり多く使われていることがわかる。また、*eat away* の他動詞用法も自動詞用法に比べ 1800 年代から 1960 年代にかけて多く使われている。しかし、近年になり自動詞用法が多く使われるようになったということがわかる。このことから、*eat away* の自動詞用法は、*eat* の自動詞の使用や他動詞の *eat away* のあとに発達してきたということがわかる。

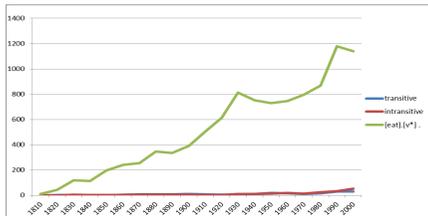


表 1 eat(int), eat(tr) away and eat(int) away

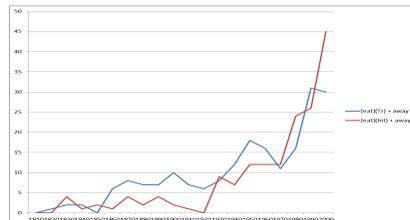


表 2 eat(tr) away and eat(int) away

5. Crosslinguistic Perspectives

本論の主張は、不変化詞の *away* が二次述語であったものが Aspect head へと変化したことによる文法化であるということである。この分析は、Roberts and Roussou (2003)の upward reanalysis と合致したものである。本節では、類似した文法化の現象が他言語にも見られると論じる。

青木(2010)は、複合動詞の「切る」の文法化の現象を観察し、通時的には、「切断」の意味を表していたものから「完了」のアスペクトへと変化したと論じている。この観察が正しいとすると、日本語の複合動詞の意味変化は、英語の不変化詞 *away* の文法化と同様の分析が可能である。近年、いわゆる語彙的複合動詞と言われている複合動詞には 2種類あり、通常の 2つの動詞が結合しているものに加えて、V2 がアスペクトを表す複合動詞は、2つの動詞が結合しているのではなく、V2 が機能範疇に生成されるべきであるという主張が多くなされている (cf. Nishiyama and Ogawa (2011), Ogawa and Niinuma (2011), Fukuda (2012), 影山(2012))。

- (11) a. [v V1 V2] b. [AspP [NP V1] V2]]

もし、この主張が正しければ、青木(2010)の観察は、V2 が V1 と結合していたものから、機能範疇へと変化したものであると考えることができる。つまり、日本語のアスペクトを表す語彙的複合動詞は、英語の不変化詞 *away* の文法化と同様、upward reanalysis ということになる。